

Takashi AKIYAMA Poster Museum Nagaoka

2016-10-15

# APM news 160

秋山孝ポスター美術館 長岡

歴史的建造物・金庫扉と雁木のある美術館 (旧北越銀行宮内支店)

第35回美術館大学

「フランク・ロイド・ライトが残した建築工房タリアセンについて」

8月4日(木) pm4:00~pm4:30 / 受講者: 82名 / 講師: 半田雅俊、高田清太郎、秋山孝



〒940-1106 新潟県長岡市宮内2-10-8  
TEL 0258-39-1233



フランク・ロイド・ライト(1867-1959)は、近代建築の三大巨匠とも呼ばれるアメリカの建築家である。ライトが設計し弟子たちとともに建設した建築工房および共同生活のための建築群のことを「タリアセン」と名づけた。今回の美術館大学ではこのタリアセンで学んだ経験のある建築家、半田雅俊氏から話を伺い、高田清太郎氏、秋山孝館長を交えて鼎談した。

半田氏はまずライトの半生を語った。1867年に生まれたライトは91歳で没するまで激動の時代を生きた。それは馬車から飛行機まで乗り物に変化した技術革新の時代である。3回の結婚を経験し、その中にはスキャンダラスな恋愛もあったため40~60代の働き盛りの時期には仕事がなかった。そんな中、おぼの土地を相続したライトが65歳で始めた一種の事務所兼建築塾がタリアセンである。

半田氏がタリアセンで学んだことの中に「実感を大切にすること」がある。素材に触れることで、その素材の手触り、温かさ、硬さなどを知り、理解することである。タリアセンの学生には家がない。テントが支給され、敷地内に自分でテントを張り、そこで居住する。食事は食堂、トイレ・シャワーは施設内にあるのでそこを利用する。夜間の移動はランプを持って。そうした生活を送ることで学生たちは、寒暖、雨の降り方、日照時間など、環境を知る。人間は冷暖房の利いた室内にいるが、建物は外の環境にさらされている。建物が日々さらされているストレスを自らも実感、体験する。「環境を体験する」「自然から学ぶ」こともタリアセンで学んだことである。室内で作業をしているとスタッフから「こんな天気の良い日に中にいるな、外へ行け」とよく言われたと半田氏は懐かしそうに語った。

最後の質疑応答の時間には多くの質問が寄せられた。中でもライトの人の柄がわかるような逸話をという要望に対し、半田氏が語った話が興味深い。半田氏はアメリカに渡ってライトが各地に残した建物を見て回った。その中には既に観光施設のようにになっているものもあれば、誰かが住み続けているものもあった。そこで感じたのは、ライトの建物は誰かが住み、生活感のある空間の方が優れているということであった。通常我々が建物を公開するとき、そこに生活感とは排除して公開する。その方が美しく見えるからである。しかしライトの建物は生活感があって完成するような魅力があったという。秋山館長は、住む人のことや建物のことを考え続けた原作者の情熱の力がそこにあると述べた。

また、この日は秋山館長から喜ばしい報告があった。秋山孝ポスター美術館長岡(APM)が正式に有形文化財に登録されたことである。ライトの建物のように、今後もAPMが長く愛される存在でありたいと思う。(森山奈帆・APM職員/APM公式ホームページより抜粋)